

木村先生を送る

—勧君更尽一杯酒

岡本和夫（教養学部数学教室）

私が初めて木村俊房先生にお目にかかったのは、1968年という、当時学生であった私どもにとっての東大闘争、当時教官であった先生にとっての東大紛争の年でした。数学科に進学して最初の週の火曜日朝10時ちょっと過ぎ、1号館350番教室に今と変わらぬ貴禄をもった先生が入ってこられ、微分方程式論の講義が始まりました。私はそれ以来20年間以上、公私共にわたくちご指導頂きました。不肖の弟子でありながら長い間お付き合いいただきたということで、先生のご退官にあたり一文を書かせて頂くことになりました。まことに光栄であります、同時に、先生が東京大学から去られるということは厳しい現実とはいえ、残念でなりません。

木村俊房先生は1952年本学理学部数学科を卒業され、直ちに立教大学理学部の助手になられました。同大学の助教授を経て、1963年東京大学教養学部助教授から1965年理学部数学科にお移りになりました。それ以来、ご研究と後進の指導に当たってこられたわけですが、1971年に教授になられて以降は、2度の日本数学会理事長をはじめ、日本学術振興会、文部省学術審議会等の委員を歴任され、研究体制の整備にも多大の努力を払われました。この様な広範なご活躍は、我国の数学の発展のためとはい、ご自身のご研究と両立させるという難問を引き受けることにもなったと想像致します。それ故のご苦労は人並ではなかったと存じますが、私にとっては、先生は一貫して数学研究の先達であり、理解者であります。

先生のご専門は、複素解析学とくに複素領域に

おける微分方程式論です。福原満洲雄名誉教授が日本に導入し、基礎付け、発展させた微分方程式論は、木村先生をはじめとする「福原スクール」の方々によって、局所理論については、ほぼ完成の域に達したといって良いでしょう。勿論、研究すべき課題がなくなったという意味ではなくて、何を調べたら良いかということが明らかになった、ということです。いずれにせよ質的な発展をするために新たな問題意識を導入しなければならない場面に当たって、木村先生は微分方程式の大域理論に注目されました。先生の初期の業績として、一階代数型微分方程式の Malmquist の定理の拡張が有名です。これは、解の特異点の様子から微分方程式の型を決定するという問題で、先生によって完全に解かれました。ご研究の出発点も大域理論であったのですが、長期的な戦略として、先生が私共に強調し続けて来たのは次の2点です。

- (1) 解析的な手法のみにとらわれず、幾何学的な視点、代数的手法を積極的に導入すること。
- (2) 問題意識も微分方程式だけではなく数学全般に求めること。

ご自身の研究テーマも微分方程式にこだわらずに複素解析学へと広げ、数多くの業績をあげられました。それは理学部紀要で紹介されるでしょうから、ここでは敢えて省略致します。私自身も含まれる「木村スクール」には、数学的動機は勿論、先生のお人柄もあって、狭い意味では微分方程式論とは関係の薄い研究者がたくさん集まっています。私個人にとっては先生を慕って集まってくれる他分野の研究者、また海外の研究者との交流は

何よりも有難いことでした。

数学以外で木村先生と切っても切れないものはタバコとお酒です。タバコは以前は新生を吸っていましたが、最近はもっと軽いものになりました。私も長い間お付き合いしておりましたが数年前に禁煙しました。最近復活の兆しがあり先生に意志薄弱を笑われております。ご自身は禁煙を志したこともないようにお見受け致します。お酒について今更付け加えることはないかもしれません、敢えて書きます。以前から酔っても崩れない酒呑みで、その点でも私は不肖の弟子であります、量のほうは、健康管理のためでしょうか、幾分自肅なさっているようです。酒席にご一緒するとよく漢文や古代仏教から題材を採って、いろいろな

お話を下さいました。その影響で私も中国古典に親しむようになりました。まだまだ、数学非数学諸般にわたって、お教え頂くべきことが残っているようです。

4月から東京理科大学に移られます。数学の研究テーマをたくさんお持ちで、諸事雑用から幾分解散されるから、と張り切っていらっしゃるようですが、お酒の相手に不足したときはいつでも一声おかけください。益々のご自愛とご発展をお祈り申し上げます。横書きでは気分がでないので、「漢書」から一節引用して木村俊房先生をお送りする言葉と致します。

夫鹽食肴之將，酒百藥之長，嘉會之好